

【同光会】

今回は須永が大正10（1921）年に同光会という団体の創立大会で詠んだ七言律詩二首を紹介します。

同光会は「内鮮融和」、つまり内地の日本人と外地の朝鮮人との融和を目標に結成された団体です。東京に本部を、ソウルに朝鮮総支部を置きました。

高村謹一編輯兼発行『亜細亜時論』第5巻第2号（黒龍会出版部、1921年2月）によると、発起人には300人超が名前を連ね、その中には大隈重信元首相や頭山満のほか、後に首相となる浜口雄幸や近衛文麿らもいました。二回の準備委員会を経て大正10年2月3日に東京・築地精養軒で開かれた創立大会には230人が出席しました。ちょうど帝国議会で普通選挙法案が提出された日と重なったので、出席者の数は発起人より少なくなっていますが、この後の評議員会で大隈を顧問に、頭山らを相談役、近衛らを評議員に選びました。黒龍会の内田良平が幹事長として会の運営を担いました。須永は発起人に名前を連ねています。

創立大会では大隈が賛辞を寄せていますが、代理が朗読しました。大隈は翌年1月に亡くなりました。

【無二の忠臣朴時奎】

大会の席上、須永、朴時奎、蟻生十郎の三人が自作の詩を朗読しました。

朴時奎は大韓帝国期の文官で、息子は独立運動家として知られる朴尚鎮です。朴

尚鎮は慶尚北道で富豪を襲い、殺害したなどとして死刑判決を受けました。上級審で判決が覆ることはなく、刑は確定しましたが、無罪を信じる父親は東京に出て息子の恩赦を請願しました。

請願書は国立公文書館に保存されており、朴時奎は自分の肩書を「旧韓国勅任三等奎章閣副提学」としています。

朴時奎が同光会の創立大会に出席したのはちょうどこの頃で、当時の新聞報道は「罪はないのは郷里の誰彼も信じて居る」との父親の証言や、尚鎮を逮捕した警察官の賄賂の要求を父親が拒絶したこと、法廷ではその警吏の証言を唯一の証拠として有罪となったなどとしています（『読売新聞』大正10年2月5日付）。しかし、結局刑は執行されました。

一連の顛末は世間に広く知られたようで、高群逸枝が詩集『東京は熱病にかかつてゐる』の中で次のように詠んでいます。

李王家無二の忠臣朴時奎。

彼の愛子は朴尚鎮。獨立光復團長。

あはれ愛子は強盜殺人放火の汚名を以て刑場の露と消え、

今は飄轉流浪の客となる。

（高群逸枝 著『東京は熱病にかゝつてゐる：長篇詩』万生閣、大正14年。 国

立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1018311>）（参照
2025-06-15）

【蟻生十郎】

須永や朴時奎とともに詩を披露した蟻生は、下野新聞社史編さん室編『下野新聞
百年史』（下野新聞社、1984年）によると栃木県下都賀郡絹村（現小山市）
出身で、もと吉沢儀一郎といい、自由民権運動に関わりました。

しかし刑事事件の容疑がかかりソウルに逃げ、『大韓日報』を創刊しました。明
治39（1906）年9月、佐野出身の戸叶薫雄を編集長に迎え、順調に経営を
続けていましたが、生家との手紙から足がついて逮捕されたため戸叶が経営を
引き継いだということです。

【須永の七言律詩二首】

須永の二首の詩は、いずれも『輟齋詩稿続編』に入っています。

同光会席上賦示 時辛酉二月三日天大雪

十歳応霑雨露仁

如何謹域尚荊榛

果知俗吏昧時務

不見嘉謀臨兆民

西境煙塵何擾々

北辺羽檄更頻々

希將諸士扶持力

重看雍熙八道春

同席上遥寄諸友 此夕天大雪

兩國車書已合并

同光又此結新盟

山川一色無今古

種族千年本弟兄

絶海堪聞頻報警

閱牆何事漫相争

滿城風雪蕭條夕

把臂悲歌酒百觥

【雨露の仁】

一首目の冒頭の句は、明治43（1910）年の併合で朝鮮の人たちに雨露の恵

みが行き渡っていると強調しているのでしょうか。

二句目の「權域」は朝鮮のことです。

四句目「不見」には「無復」と朱正が入っています。詩稿を綴じた永島信吉氏によると、『輟斎詩稿続編』の詩稿には福井学圃の朱正を経たものが多く、また、三島中洲の朱正批評したものも混在するということです。福井は須永と同じ岡本黄石門下の漢詩人で、連載五、六回目にも出てきました。ただ、福井は大正7年に、中洲は翌8年にそれぞれ亡くなっているので、朱正は二人とは別の誰かが入れたのでしょうか。

五、六句目は当時の東アジア情勢の混乱を詠んでいるようです。西方の中国大陸では軍閥同士の内戦が起き、日本が支援した安徽派が負け、北方ではロシア革命干渉のためシベリアに出兵した日本軍と日本人居留民などがパルチザンに殺害される尼港事件が起きるなどしました。

八句目の「雍熙」は天下が治まって人々が楽しんでいるさまを言い、「八道」は朝鮮のことです。これだけみると朝鮮だけは情勢が落ち着いているようですが、この二年前には三・一独立運動が起きて多くの死者を出し、日本は朝鮮統治政策の転換を余儀なくされたばかりです。

【日鮮同祖論】

二首目の4句目に「種族千年本弟兄」とあります。日本と朝鮮の民族はもともと同じだったという「日鮮同祖論」を言っているのでしょうか。この言説は併合時や三・一運動の時などに日本側で強調されました。

【同光会解体】

姜東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究—1920年代を中心として—』（東京大学出版会、1979年）によると同光会は朝鮮総督府を批判し、「内政独立期成会」という組織をつくるなどしました。総督府はこうした活動が治安維持に有害だと判断し、内政独立期成会を解散させました。この後、同光会自体も急速に衰退して解体してしまったということです。

【横領被害、息子を追悼…】

朴時奎も発起人の一人で、評議員にも選ばれましたが、どのような気持ちだったのでしょうか。その後、十万円もの財産を横領されたという報道もありました（『読売新聞』大正12年7月3日付）。「見る影もない正三品の成れの果」「李王家の忠臣朴時奎」などの見出しが紙面に躍っています。

この報道が出たころ、前後は分かりませんが、朴時奎は「祭亡子尚鎮文」という亡き息子の死を悼む文を作っています。2015年、親子の地元の蔚山博物館がこの文を公開したということです（『聯合ニュース』2015年8月13日）

（<https://www.yna.co.kr/view/PYH20150813025300057>）。（参照 2025-06-19）

2025年6月20日 広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>